

(2) 新旧府内の祭礼にみる歴史的風致

(2) -1 新旧府内について

中世には、現在の大分市中心部の南東側にあたる大分川沿いに大友館^{おおともやかた}を中心とした「府内」と呼ばれる町が築かれ、戦国時代には国際貿易都市として発展した。また、その頃の町は、京都の祇園会^{ぎおんえ}を模して様々な飾りのついた7基の山車が「府内」の町を通る「祇園会」^{ぎおんえ}でにぎわっていた。当時(天正9~14年(1581~1586))の「府内」の様子は、江戸時代初期に描かれたとみられる『府内古図』^{ふないこず}によって知られており、その中には、40以上の町名が書かれていることが確認されている。これらの町は、府内城が築城され城下町が建設された慶長7年(1602)に「府内」から府内城下に住人ごと移転されたと考えられており、戦国時代の「府内」と江戸時代の府内城下町には住人を含めた連続性があると認められる。また、『府内古図』には多くの社寺が描かれているが、このうち、春日神社、西新町天満社、若宮八幡社、長浜神社は江戸時代にも引きつづき存続しており、祭礼も継続していたとみられる。



新旧府内の範囲と神社などの位置図

春日神社周辺の^{せいけ}勢家町は、『府内古図』では、すでに町場として表現されており、中世の段階で町があったことが分かるが、江戸時代にも引きつづき城外の町場として存続した。また、中世の段階では勢家町に「沖ノ浜」という南蛮貿易を行った港があり、江戸時代には千代町に「京泊」(^{きやうどまり}堀川)という参勤交代や物資の運搬のための港が整備され、城下町の南西からは肥後、筑前、筑後への道、南東からは佐賀関、日向への道、北西からは豊前への道が設けられていた。また、城下町の南にある上野丘の台地の北側には東から西へ「初瀬井路」が流れており、生石までつづいていた。江戸時代の府内城下町の様子は『^{ぶんごふないじやうのえす}豊後府内城之絵図』(正保元年(1644))によって知られており、40余りの町名や社寺・藩の主な施設などが書かれている。また、西に向う豊前道沿いの王子神社周辺(^{だのはる}駄原村)や「浜の市」(^{ゆすはらはちまん}が行われる)柞原八幡宮^{ぐう}仮宮周辺(生石村)の「西三ヶ村」は、城下町外ではあるが町として把握されていた。この地域のにぎわいは府内藩主大給松平氏(^{おぎゆうまつだいら}が浜の市見物をする様子を描いた『^{ごじやうかえす}御城下絵図』に描かれていた。また、明治時代以降、大分県の県庁所在地として発展し、当時の建造物では、大分銀行赤レンガ館(旧二十三銀行本店)が残されている。このため、府内城下町と近代以降の大分県の県都としての連続性を考慮して、現在の大分市中心市街地である新旧府内の範囲に含めて把握する。

以上から、新旧府内として把握する範囲は、概ね『府内古図』に描かれている範囲に『^{ごじやうかえす}御城下絵図』及び『^{ぶんごふないじやうのえす}豊後府内城之絵図』の範囲を加えたものとし、この範囲にある10ヶ所の神社などに関わる歴史的風致を取り上げる。



『^{ふないこず}府内古図』
(江戸時代初期 17世紀)



『^{ごじやうかえす}御城下絵図』に描かれた浜の市仮宮
(17世紀後半～18世紀前半)



『^{ぶんごふないじやうのえす}豊後府内城之絵図』(正保元年(1644))

(2) -2 歴史的風致

1) 大友氏の顕彰活動

1) -1 はじめに

大友宗麟が治めた時代の府内の町は、中国や朝鮮半島・東南アジア地域との貿易により繁栄した国際貿易都市であり、町の中心には戦国大名の館を配置した都市である。その中心となるのが大友氏遺跡であり大友氏館、旧万寿寺、御蔵場、上原館からなり、14世紀の鎌倉時代から16世紀末の戦国時代まで400年余りにわたって、豊後国を治めてきた歴史を今に伝える遺跡である。

そのため大友氏のこの功績を称える大友氏を顕彰する活動が古くから行われてきた。

文禄元年(1592)、大友氏22代目となる大友^{よしむね}義統は豊臣秀吉より豊後国を取り上げられ、追放された。しかし、旧大友家の流れを汲む大名及び家臣の子孫は各地で存続しており「大友家」のつながりを継続しようとする活動が行われており、明治時代からは、その活動が大分県内で広がりを見せ、大友氏を顕彰する活動へと移り変わっていき、現在につながっている。

1) -2 建造物

大友氏遺跡【史跡】

大友氏遺跡は、1580年代の府内の町の様子を現した『府内古図』(江戸初期作成)によると、町の中央に大友^{おおともやかた}館が描かれている。現在、国指定史跡大友氏遺跡とされて発掘調査と史跡の整備が進められている。発掘調査によれば、最盛期の館は、200m四方の敷地を有し、その中に戦国大名では類例をみない5000㎡を超える広大な庭園を築いていたことが確認されており大友氏館跡に隣接する唐人町跡及び推定御蔵場跡からなる。天文20年(1551)にフランシスコ・ザビエルが大友氏館を訪問したことを機に教会や病院、コレジオが建てられ、南蛮船も来航するなど、異国の文物を伝える南蛮文化が花開いていた。現在までの発掘調査では、輸入陶磁器やキリシタン遺物などが数多く発見されている。



大友氏館跡

上原館跡【史跡】

大分市上野丘の台地には、「上原館」という名で知られる、もう1つの大友氏の館が築かれていた。当時、大友氏館は日常生活や政治を行うための館として使用され、上原館は戦などに備えて守りを固めた館であった。敵の進入を防ぐための土塁や空堀といった戦国時代の面影を色濃く残す貴重な遺跡である。



上原館跡

大友社

大友社は、大分市上野にある若宮八幡社の境内にある。
『神社明細帳』(明治44年(1911))の追記事項によれば、当時は「碩田社」と呼ばれ祭神は^{せきでんしゃ}大友氏初代^{おおともよしなお}大友能直である。
^{いっけんしやながれづくりどうぼんがき}一間社流造銅板葺で、若宮八幡社が明治14年(1881)に他の土地へ移転。その後大正10年(1921)に再び現在地に戻った時に大友社は存在していたため、それ以前の建築である。



大友社

大友親世の墓

大友氏10代大友親世の墓で墓誌銘によれば、大友親世は応永25年(1418)に亡くなっている。その後、墓が造られていたが、天正年間の戦いで墓が壊されたため明治11年(1878)に吉岡氏(旧大友家家臣)などにより再建されたとある。
凝灰岩の立輪塔で『府内古図』に描かれている「白蓮地」の近くにある。



大友親世の墓

贈従三位 大友宗麟公記念碑

記念碑は、若宮八幡社の境内にある。
大正13年(1924)に大友宗麟公に従三位が贈られており、昭和11年(1936)に若宮八幡社境内に大分県教育会、大分市教育会、大友宗麟顕彰会によって記念碑が建てられた。



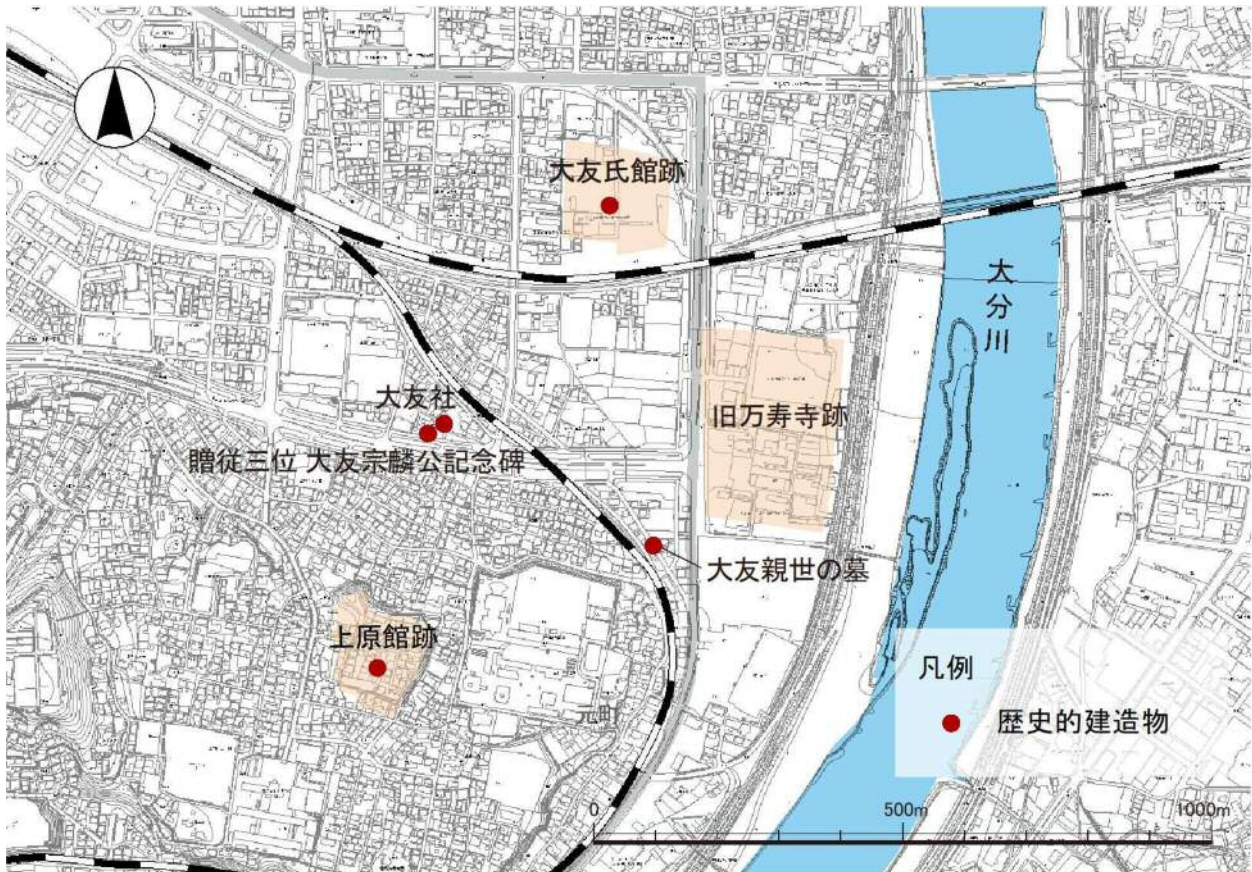
贈従三位 大友宗麟公記念碑

大友宗麟公銅像

昭和12年(1937)、大分市制20周年を記念して、大分新聞社が寄付を募り、春日浦に建設した。太平洋戦争中、金属供出により撤去されたが、市民の要望により昭和33年(1958)に大分市長上田保を会長とする「大友宗麟公銅像復元委員会」により再建された。



大友宗麟公銅像



歴史的建造物の位置図

1) -3 活動

1 大友氏の顕彰活動

大友氏が豊後国から追放されたのち、九州内へ点在していた旧大友家家臣たちにより「大友家」のつながりを存続する活動が見られる。寛政元年(1789)に作成され、高野山に伝えられた『高野山本覚院文書』(県指定有形文化財)の「大友由緒姓名記」には、旧大友家家臣の子孫およそ1700名の名前が記されている。この名簿は熊本藩家臣で大友家の流れを組む松野氏の指示により鶴崎に在住していた吉岡氏によって作成され、高野山が大友家歴代当主の供養祭を行う時に使用されていたと考えられる。高野山本覚院の前身である西生院は大友家第20代大友義鑑の宿坊であったことや江戸時代も豊後国の参拝者の宿坊であったこと、徳川家の儀式をつかさどる高家となった大友氏からの文書が残されていることから、大友家とのつながりが深いと考えられる。また、『府内藩記録』(正徳2年(1712))によれば、1月17日松野家の家臣が大分を訪れ、大友家ゆかりの場所や旧家臣を訪ね大友家の墓所を参拝するなど「大友家」のつながりを強めていたことが分かる。

明治11年(1878)吉岡氏をはじめとする大友家家臣によって大友氏10代大友親世の墓が再建された。墓誌銘によると



大友親世の墓前で供養を行う様子

大友親世は、応永25年(1418)に亡くなり、天正11年(1583)の戦いで墓が破壊されたため、明治11年(1878)に吉岡氏をはじめとする旧大友家家臣の子孫によって再建されたとある。毎年10月2日、万寿興聖禪寺による供養が行われており、墓に隣接する「まこもが池」は、万寿興聖禪寺の山号である「蔣山」の由来となった池で『府内古図』には「白蓮池」と記されている。供養の時には、墓前に花が供えられ読経が行われる。

明治19年(1886)松野家の末裔、松野直友氏は、当時建設が計画されていた「大友祖霊社」が完成した際に宝物として奉納してもらうため、伝来の古文書と宝物を地元有志7名に預けた。明治23年(1890)の『大友祖霊社建設発起書』によると、日野幸頭を発起人として、大友祖霊社の建設と、そこに松野直友氏より宝物を寄贈し、大友家の墓を修理する計画が記されている。また、建設のために旧大友家の家臣子孫に対して協力を呼び掛けている。実際には大友祖霊社は建設に至らなかった。しかし『神社明細帳』(明治44年(1911))によれば、大友氏初代大友能直を祀る「碩田社」が若宮八幡社境内にあり、これが現在の「大友社」にあたる。

大正10年(1921)に「大友宗麟顕彰会」代表であった高山英明氏(第4代大分市長(昭和4年(1929))～昭和7年(1932))自身が大友宗麟の功績をたたえるため『宗麟』を出版した。

大正13年(1924)には、大友宗麟は、その功績により従三位を贈られた。また『豊州新報』(大正13年(1924))によると、当時「大友会幹事」でもあった高山英明氏の話として、「大友氏顕彰会は、昔より活動しており、同団体は大正13年(1924)10月5日で「大友会」の系統的団体となった。この会は、大友宗麟の功績を顕彰することを目的とし、大友家の子孫である大友義一氏の要望により、『大友二十二代史』の刊行、寄付金による「大友宗麟像」の建設、「大友神社」の建設などを計画している。」と書かれている。

昭和11年(1936)には、若宮八幡社境内に大分県教育会、大分市教育会、大友宗麟顕彰会が「贈従三位大友宗麟公碑」を建立したことが碑文に書かれている。

翌年の昭和12年(1937)には、大分市制20周年記念事業として大分新聞社が寄付を募り出資して大分市春日浦に「大友宗麟公銅像」を建設した。また、大分市上野にかつて大友氏館があった場所(現:国の史跡大友氏館跡(上原館跡))に「西山城跡」の石碑を建立した。大友宗麟公銅像除幕式(「大分新聞」昭和12年3月22日)には、大友義一、松野顕佑が出席しており、式後に若宮八幡社境内地にある「大友神社(現:大友社)」に参拝している。その後この銅像は、太平洋戦争中に金属供出のため撤去される。しかし、市民の要望により昭和33年(1958)上田保大分市長を会長とする「大友宗麟公銅像復元委員会」により再建された。



『宗麟』(大正10年(1921))



大友宗麟公銅像の除幕式を伝える大分新聞の記事

昭和57年(1982)には、大友宗麟が4人の少年をヨーロッパへ派遣した「天正遺欧使節」から400年にあたることを記念して大分市が大友宗麟の銅像を大分駅前^{てんしょうけんおうしせつ}に建て、顕彰行事を行った。それに伴い開催された記念講演会には多くの市民が参加し、銅像の除幕式では市内小中学生による鼓笛パレードが行われた。

昭和59年(1984)には、大分合同新聞社創刊百周年を記念し、大友宗麟の成長を描いた映画「国東物語」が上映された。本映画は、大分市をロケ地とし、市民もエキストラなどで映画作成に携わっている。同映画は国際映画祭でのグランプリの受賞や文化庁から優秀映画の表彰を受けるなど、高い評価を得ており、市民の関心も非常に高かった。



昭和58年(1983)10月24日



昭和59年(1984)9月4日

国東物語に関する資料

平成10年(1998)には、大友氏館跡発掘調査により庭園跡が発見され平成13年(2001)に国の史跡に指定された。これを契機として大分市教育委員会による大友氏遺跡の現地説明会やイベントの開催が毎年実施されており、その中で「NPO法人大友氏顕彰会」「大友歴史保存会」「大友氏遊学会」「豊後大友宗麟鉄砲隊」といった大友氏を顕彰する市民団体が設立されてきた。

団体の活動としては、大友氏や大友氏遺跡に関連したフォーラムや講演会の開催、大友氏館跡

や上原館跡の大友氏遺跡及び若宮八幡社などの大友氏に関連する社寺のガイド、会員の研修など活発に取り組んでいる。

2 現在の顕彰活動

平成24年(2012)より開催されている「宗麟公まつり」は、「NPO法人大友氏顕彰会」「おおいた応援隊大友歴史保存会」「大友氏遊学会」「豊後大友宗麟鉄砲隊」からなる「宗麟公まつり実行委員会」が主催となり、市民、来訪者など多くの方が大友宗麟に関する歴史や文化に触れて楽しめるイベントとなっており、以下のような企画を行っている。

- ・甲冑武者行列
- ・大友宗麟に関連する演劇
- ・大友氏遺跡を巡るガイドツアー
- ・ポルトガル民俗歌謡の演奏

各団体はイベント時以外も活動を行っている。

◆NPO法人大友氏顕彰会

- ・大友氏顕彰フォーラムの開催や情報誌の出版など

◆おおいた応援隊大友歴史保存会

- ・歴史ツアー、教育活動など

◆大友氏遊学会

- ・ボランティアガイドの実施など

◆豊後大友宗麟鉄砲隊

- ・火縄銃演武の再現による古式火縄銃の保存、砲術流儀の継承と伝承など

平成25(2013)年度より大分市教育委員会が制作した小学校6年生用副読本『府内から世界へ大友宗麟』を市内全小学校に配布し、大友宗麟と府内の町について授業を行っている。



2018戦国大名フォーラム in 豊後府内



2018戦国大名フォーラム in 豊後府内



宗麟公まつり

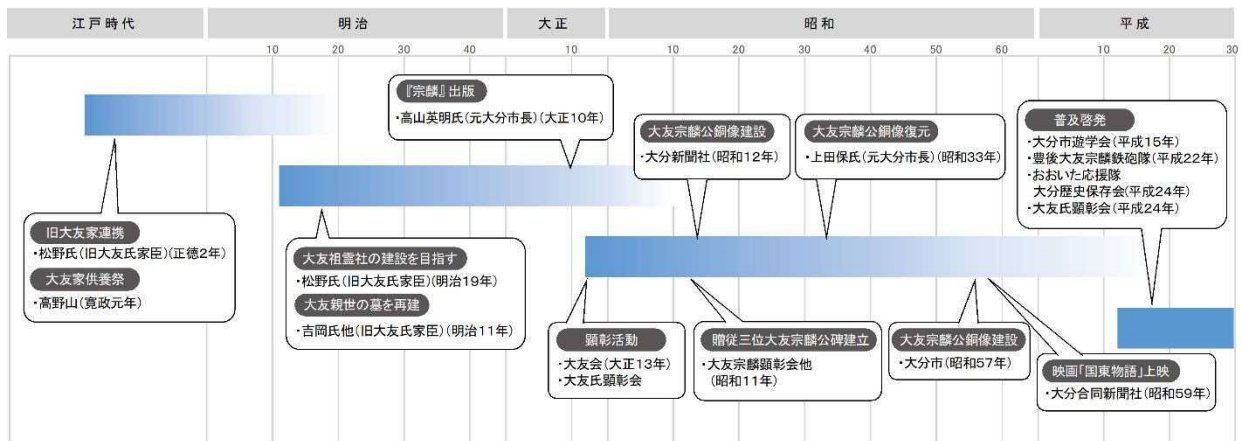


豊後大友宗麟鉄砲隊による演武

平成29(2017)年度から小・中学生を対象として副読本から問題を作成した「Funaiジュニア検定」を実施、その合格者から希望を募り、大友氏に関連する史跡や神社などをガイドする「Funaiジュニアガイド」の活動を実施している。JRウォーキングや大友氏遺跡現地説明会、国民文化祭の時には、大友氏館跡や上原館跡、若宮八幡社などを手作りの説明ブックを使用してガイドを行い、参加者から好評を得ている。また、大分市の小中学校教諭の希望者を対象として「歴史教育研修」を実施し、大友氏館跡や上原館跡、『府内古図』にある神社・寺院・町割り、若宮八幡社、大友社などを歩きながら学び、副読本『府内から世界へ大友宗麟』の活用について研修をはじめている。



手作りのガイドブックで若宮八幡社を説明するジュニアガイド



※昭和12年、昭和33年の大友宗麟銅像は大分市春日浦。昭和57年は大分駅前。

大友氏に関連する顕彰団体の推移

1) -4 まとめ

大友氏は、鎌倉時代からおおよそ400年にわたり豊後国を治めてきた。特に南蛮貿易により府内の町を繁栄させた大友宗麟の功績を顕彰する活動は江戸時代から行われている。

現在では、この活動を継承しつつ、また多くの市民が参加するなどその形を変えながら広く大友氏を顕彰する活動が繰り広げられており、関連する建造物と共に歴史的風致を形成している。

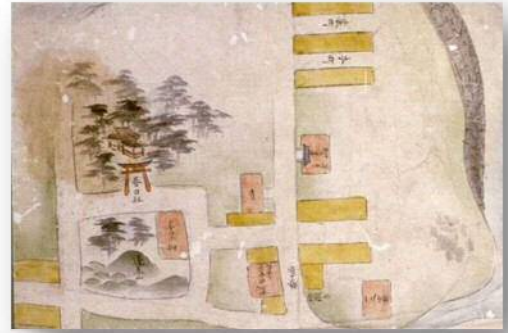
かすがじんじゃ

2) 春日神社の祭礼

2) -1 はじめに

春日神社は、大分市街地に古くからある神社で、国司・大友氏・府内藩主から厚い信仰をあつめていた。また、大分市民にはなじみのある神社で、初詣やお宮参り、七五三など多くの参拝者が集まる。

天平時代の創建とされ、豊後大友氏初代大友能直ぶんご よしなおにより社殿を再建したとされている。戦国時代の府内の町の様子をあらわした『府内古図』にも描かれており、武家の信仰が厚く、元禄11年(1698)の『豊府聞書』ほうふききがきによれば寛永12年(1635)旧暦9月19日に府内藩主日根野吉明ひねのよしあきらによって神事が再興され、流鏝馬が行われたとある。また、『御城下絵図』にも描かれており、境内にある築山「蓬来」とともに描かれ、浜の市に向う藩主の行列を見物する群衆が描かれている。



『府内古図』に描かれた春日神社



『御城下絵図』に描かれた春日神社

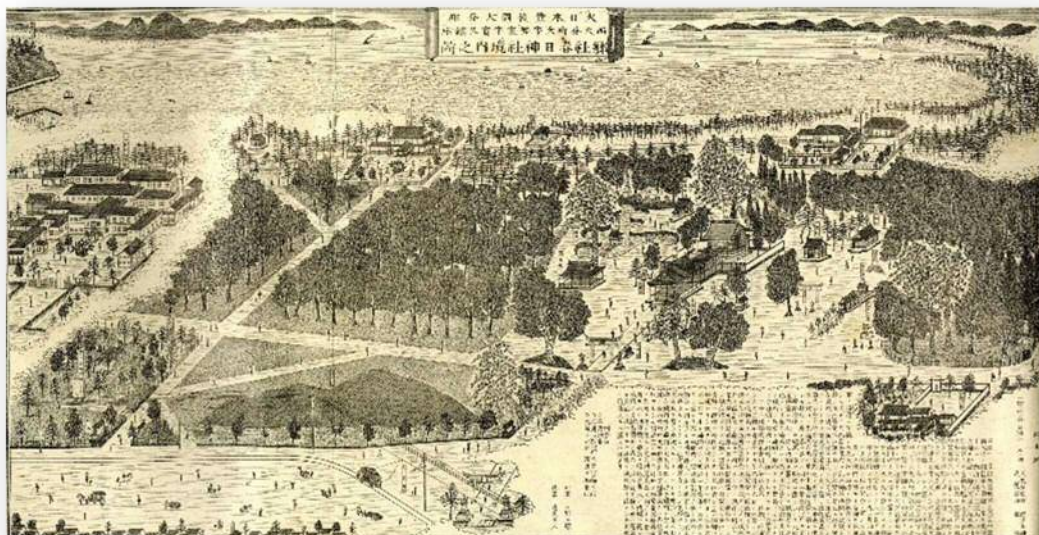
2) -2 建造物

春日神社

本殿・拝殿は、鉄筋コンクリート造銅板葺どうばんぶきである。元の建物は戦災で焼失しており、『春日神社』平成29年(2017)によると、昭和42年(1967)に再建された。境内にある建物のうち、本殿東側にある金毘羅社は切妻造棧瓦葺の妻入で一間の向拝こうはいがつく。『大日本帝國大分県社寺名勝圖録』(明治37年(1904))中の本殿右側にある琴平神社がこれにあたりと考えられる。



春日神社



『大日本帝國大分県社寺名勝圖録』 春日神社

大分銀行赤レンガ館（旧二十三銀行本店・旧府内会館）【登録有形文化財】

大分銀行赤レンガ館は、辰野金吾、片岡安の設計で明治43年(1910)着工、大正2年(1913)に完成した。赤レンガの小口積み壁と帯状に配された花崗岩の白線がコントラストをなし、ランタンをもった八角形ドームの屋根は「辰野式ルネサンス」の特徴といわれる。昭和20年(1945)の戦災で内部は焼失したが、外壁を保存する形で修復され、平成5年(1993)に再度内部が改修された。春日神社、西新町天満社の夏季祭礼時に神輿が前を通る。



大分銀行赤レンガ館

2) -3 活動**夏季大祭**

春日神社夏季大祭は、7月18日・19日に行われる。明治30年(1897)の『神社慣例』には旧暦6月19日が祭礼日とあり、現在に引き継がれている。18日には子供神輿が巡幸する。

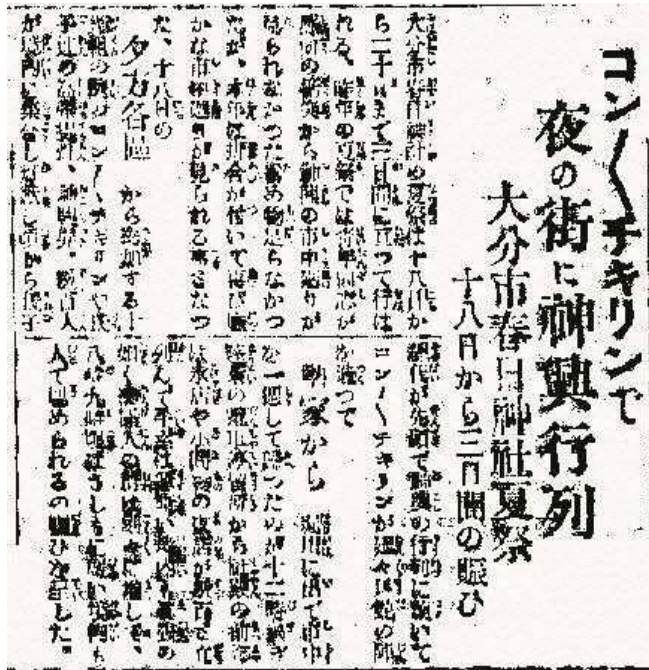
本祭である19日には、神事ののち午後2時に中学生が持つ「高張提灯」を先頭に巡幸がはじまり、神輿の進行とともに直径24cm程度の真鍮製の「鉦」を木の柄の先端に鹿の角つけた「シモク」で鳴らす「チキリン」が奏でられる。大正11年(1922)7月19日の『大分新聞』には「コンコンチキリンで夜の街に神輿行列」とある。昭和初期には、山車も巡行していたが現在は行われていない。「春日」と名のつく地区(東春日町、西春日町、南春日町、新春日町)及び神社周辺であり戦国時代の港町「沖の浜」があった勢家町を通り、江戸時代の府内城下町の入口である「笠和口」から、府内城下町で最もにぎわった「竹町」(現:ガレリア竹町)を通り、竹町東側口「春日神社夏季大祭」の横断幕をくぐる。現在の大分市街地の中心である中央通りを南下して大分銀行赤レンガ館の前を通り、JR大分駅へ向う。JR大分駅前の大友宗麟公銅像の側を通り、そこで休憩後、再び中央町を北上し春日神社へと戻っていく。



中学生の持つ高張提灯



赤レンガ館前を巡行



新聞報道での「チキリン」初例
大正11年(1922)7月19日大分新聞



「チキリン」の鉦



鹿角製シモク

秋季大祭

春日神社秋季大祭は、10月19日に行われる。この祭礼は『豊府聞書』元禄11年(1698)によれば寛永12年(1635)に、府内藩主日根野吉明ひねのよしあきらにより旧暦9月19日に祭礼を復興させたこと由来する。かつては春日浦にあった神殿に神輿が巡幸し、海水を汲んで清める神事であった。

現在は埋め立てにより海が遠くなったため、かつて海岸であった神社西側の鳥居付近まで神輿が巡幸し海水を四方に撒く神事を行っている。



春日神社「秋季大祭」神事



秋季大祭の「鳥居」
(大正10年(1921)建立)



春日神社夏季・秋季大祭範囲図（平成29年（2017））

3) 王子神社の祭礼

3) -1 はじめに

王子神社は、延久元年(1069)創建とされ、かつては「若一王子」と呼ばれており、『御城下絵図』にもその名称で登場する。王子神社付近は、江戸時代以前には「駄原村」といい、^{だのほるむら} 鑄物師が多く住んでおり、戦国時代には鉄砲、大砲の鑄造を行っていた。「駄原村」の渡辺宗寛は^{いもじ} 大友宗麟の命により大砲を鑄造し、大友氏改易後は徳川家康の家臣となり、江戸城田安門の蝶番鑄造をしている。

3) -2 建造物

王子神社

王子神社にある説明看板によると本殿は一間社^{いつけんしゃ}流造銅板葺で切妻造^{いりもやづくり}棧瓦葺の申殿とともに昭和14年(1939)に改修されたものである。拝殿は切妻造^{いりもやづくり}棧瓦葺で、銅板葺^{どうばんぶき}の向拝がつく、昭和20年(1945)の空襲での被災し、昭和35年(1960)に改築された。



王子神社

鳥居【市指定有形文化財】

鳥居は、王子神社の境内にある。

銘文によると寛政8年(1796)に府内藩主松平近儔^{まつだいらちかとも}が寄進したことが分かる。昭和20年(1945)の空襲で被災したが、のちに修理が行われた。鉄製の鳥居は全国的にも珍しく駄原村の鑄物師の技術を伝えていることから、現在では市の有形文化財に指定されている。



鳥居

植木家住宅(主屋)【登録有形文化財】

植木家は、大分市王子中町にあり、江戸時代から明治にかけて^{いもの} 鑄物業を営んだといわれる商家で、通りに北面して建つ町家であり、主屋は様式より安政年間頃(1854~1860)の建築であり、昭和45年(1970)の『大分市の文化財第11集』に写真が掲載されている。^{いりもやづくり} 入母屋造^{いりもやづくり}棧瓦葺二階建てで妻入とし、1階に出格子を構え、彫刻入りの大きな「持送り」を付けて、下屋を持ち出し、下屋両袖は漆喰で塗り込めるという特徴的な構えで、市内では数少ない近世商家建築である。王子神社夏季祭礼時に神輿が前を通る。



植木家住宅(主屋)

じょうどじいっぼくこうびょう

浄土寺一伯公廟【登録有形文化財】

浄土寺一伯公廟は、『大日本帝國大分県社寺名勝圖録』(明治37年(1904))に明治30年(1897)当時の姿が描かれており、^{れいびょう}霊廟建築として貴重である。元和9年(1623)に豊後に身柄を移された松平一伯の墓所である「浄土寺一伯公廟」は、^{いりもや}入母屋造妻入^{づくりつまいり}棧瓦^{さんかわらぶき}葺で王子神社夏季祭礼時に神輿が浄土寺の前を通る。

また、浄土寺は文亀元年(1501)に創建されたといわれ、本庫裏、表門など江戸時代から大正時代にかけての建物があり、国の有形文化財に登録されている。



浄土寺一伯公廟

3) -3 活動

夏季祭礼

王子神社夏季祭礼は、7月21日・22日に行われ、『神社慣例』明治30年(1897)によれば祭礼日は旧6月21日より23日までとなっており、現在に引き継がれている。7月21日は子供神輿の巡幸、翌22日が本祭で午後2時に中学生がもつ「高張提灯」を先頭、神輿、チキリン太鼓の順に^{だの}駄原^{はる}鑄物師作の「鳥居」をくぐり巡幸がはじまる。神輿は「鳥居」の前で何度も神輿を上下させたり、回転させたりして祭りを盛り上げる。その後、江戸時代に豊前国(現:福岡県)への道であった旧豊前街道を西へ進み、別府湾沿岸を通る臨海道路に出る。途中、大人や子供たちは、地域の方々を用意した食べ物を頂くなどして休憩する。そして、古くから残る道沿いにある駄原鑄物師の家の1つである植木家住宅(主屋)^{じょうどじいっぼくこうびょう}や浄土寺一伯公廟の前を通りながら王子地区を中心に巡幸する。



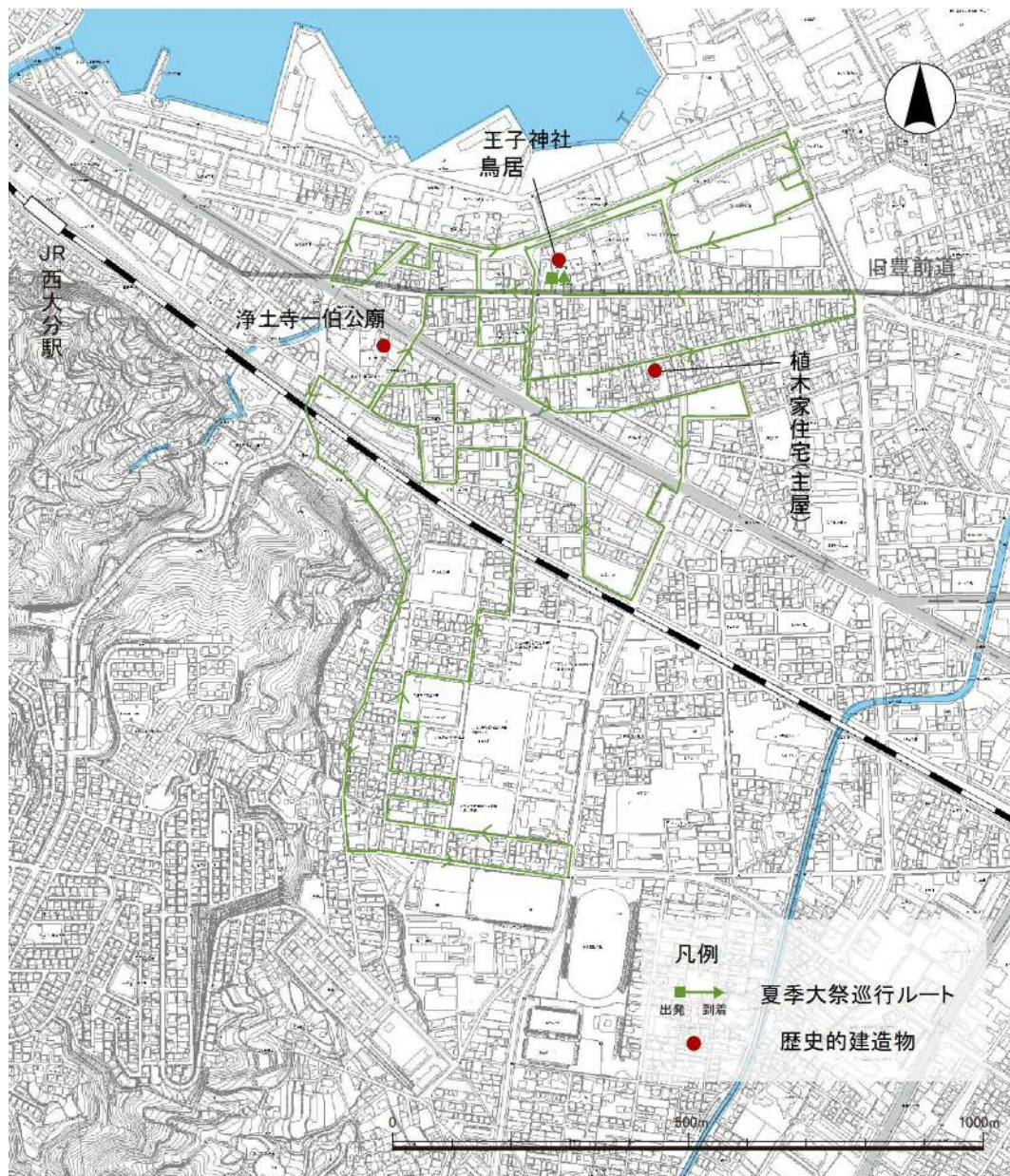
高張提灯



旧豊前道を巡幸



『御城下絵図』に「若一王子」として描かれた王子神社



王子神社夏季祭礼範囲図（平成29年（2017））

4) 西新町天満社の祭礼

4) -1 はじめに

西新町天満社は中世に存在した^{かさわ}笠和天神に起源があるとされ、1580年代の府内の町の様子を現した『府内古図』にも「笠和天神」が描かれている。『雉城雑誌』(江戸時代末期)によれば天正14年(1586)の薩摩侵入の際に御神体を避難させたのちに社殿が建てられ「^{やぶてん}藪天神」と呼ばれていた。



『府内古図』に描かれた「笠和天神」

4) -2 建造物

西新町天満社

西新町天満社は、説明看板によれば宝暦2年(1752)の造営とされる。拝殿は入母屋造平入千鳥破風付、向拝屋根は^{からほふ}唐破風造である。特に唐破風の瓦は大分地方の特徴的な^{せい}青海波模様^{がいは}に造られている。木彫も向拝唐破風に鳳凰、龍があり、神殿脇障子には獅子と麒麟が飾られている。本殿は一間社流造銅板葺で、明治35年(1902)「菅公一千年祭記念」として改築されたものである。



西新町天満社の拝殿



唐破風 青海波模様

4) -3 活動

夏季祭礼とチキリン

『豊府聞書』(元禄11年(1698))によれば、旧暦6月25日が祭礼日とされており、明治30年(1897)の『神社慣例』によれば祭礼日は6月24日と25日となっており、現在の夏季祭礼日(7月23・24・25日)に引き継がれている。現在では、7月23日は宵宮で、子供神輿が巡幸及び子供チキリン大会が催され、大会に向けて子供たちは神社内で練習を重ねている。子供たちの祭礼参加及び継承を目的とし「子供チキリン大会」が開催されている神社も多くみられる。「チキリン」を鳴らすのは笛太鼓や神輿の動きのリズムをとるためであるといわれている。

大分市中心部の神社の夏季祭礼には、全て「チキリン」を鳴らしており、その音は本市における夏の風物詩となっている。

翌24日は、午前8時に神事が執り行われ、子供神輿やチキリン太鼓が巡幸する。25日は本祭で午前8時から神事が執り行われる。午後1時に神輿の神事が行われ、その間大分市中心部の神社(春日神社、若宮八幡社、恵美須神社、王子神社、長浜神社)から手伝いの担ぎ手が集まる。これらの神社の夏季祭礼時にはお互いに神輿の担ぎ手を出すようになっており、協力しながら祭りを行っている。午後2時に神輿が出立し、中学生が持つ「高張提灯」を先頭に、チキリン太鼓が「コンコン、チキチン、チキチン、チキチン」と奏でながら神輿の後ろにつづく。西新町天満社から出る道路上には提灯と笹が飾られ、祭りの雰囲気醸し出す。巡幸は氏子の範囲を中心とし、西新町を通り、かつて府内城下町の西側入口である「笠和口」に入る。竹町西側入り口には「天満社 夏季大祭」の横断幕が掲げられている。府内城下町で最もにぎわった「竹町」(現:ガレリア竹町)をとおり、商店店主や従業員が出迎え、店によっては神輿が門口で練る。現在の大分市街地の中心である中央通りを南下して、大分駅へ向かい江戸時代に熊本や豊前へつながる道に形成された大道町を神輿が巡幸する。大道町の道は明治時代には県道となり、大分県特産の畳表の材料である「七島藪」をはじめとする様々な商品が荷馬車によって運ばれ、問屋や商店が集まりにぎわっていた。神輿がお戻りの際には、神輿を拝殿へ納めようとする役員と、祭りを終わらせまいとする昇き手との間で押し合いがある。神輿はその場で旋回したり、鳥居をくぐろうと押し戻されたりを繰り返す、最後に神輿が拝殿に納められて祭礼は終了する。



担ぎ手の手伝いに来た王子神社氏子



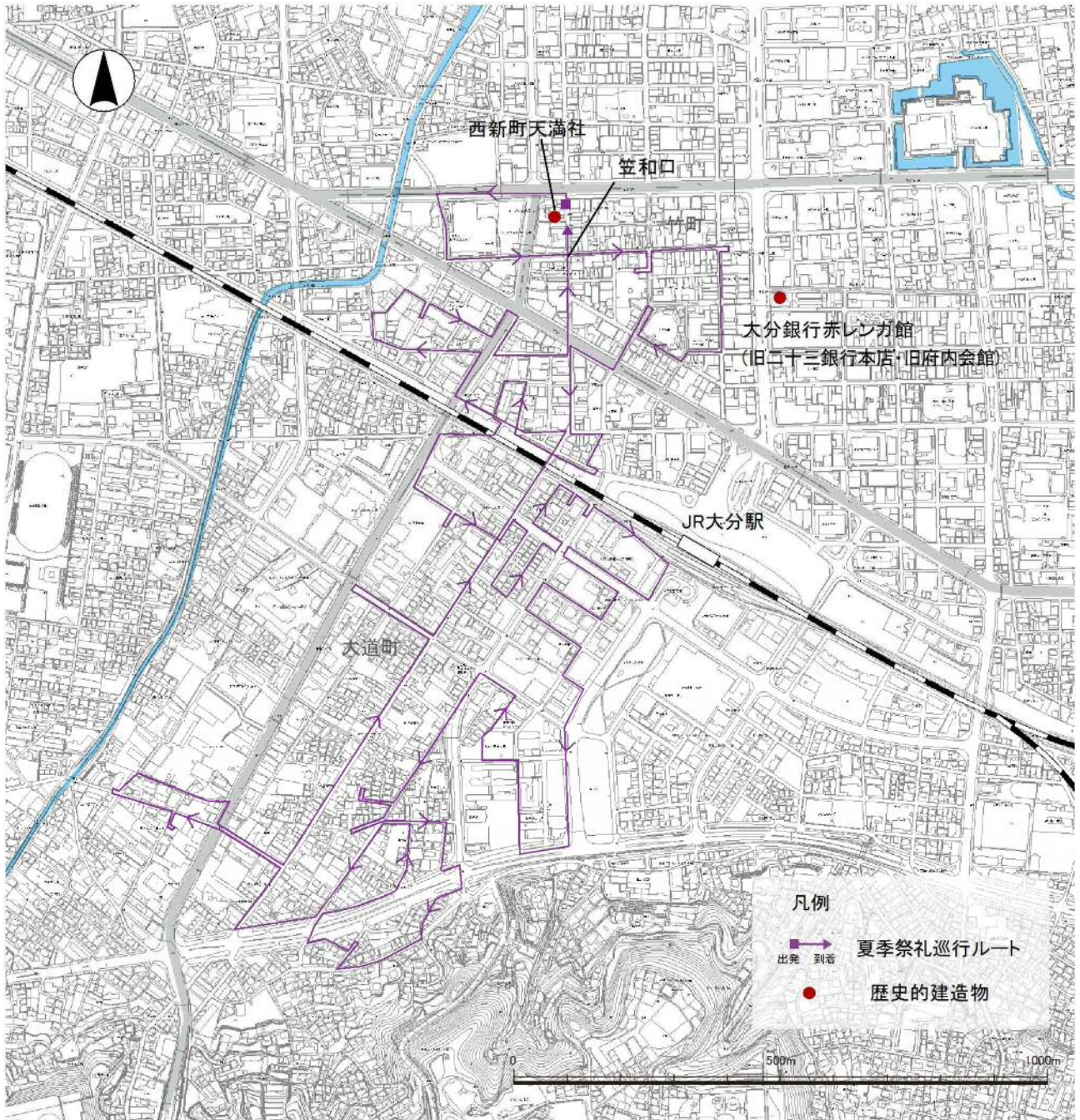
西新町天満社 提灯と笹



大道町を進むチキリン



竹町を巡幸する神輿



西新町天満社夏季祭礼範囲図（平成29年（2017））